

# 近世讃岐の名所と金毘羅参詣に関する基礎的な研究

——『金毘羅参詣名所図会』を対象として——

A Fundamental Study on Noted Places in Sanuki and Kōpira Pilgrimage in the Early Modern Period :

An Analysis of "Kōpira Sankei Meisyoze"

谷崎 友紀

TANIZAKI Yuki

本研究では、『金毘羅参詣名所図会』（1847）を分析対象とし、近世後期の金毘羅参詣の流行によって、多くの旅人が訪れた讃岐国の名所について、基本的な情報とその特徴を把握した。まず、『金毘羅参詣名所図会』に記載された名所の地図化により、金毘羅参詣の経路が想定された案内記の地理的な特徴を明らかにし、同時に名所を属性別に集計した。それによって、讃岐国の名所のほとんどが寺社と旧跡から構成されていることが指摘された。さらに、旅の目的地となる琴平において、作者の暁鐘成が「象頭山八景」に重きを置いた名所を紹介したことに着目し、象頭山八景を描いた図絵とその内容を、八景の様式と比較する形で提示した。

## 1. はじめに

本研究では、『金毘羅参詣名所図会』（1847）の分析により、近世後期に多くの旅人が訪れることとなった金毘羅大権現が位置する讃岐国の名所について、基本的な情報とその特徴の把握をおこなうことを目的とする。そのうえで今後、名所図会を用いた景観復原や、作者をはじめとした当時の人々のイメージに関する図像分析、実際の旅人の行動を明らかにする旅日記研究への布石としたい。

近世には、全国的に街道や宿場の整備が進み、多くの人々が旅に出ることができる条件が整ったことで、旅文化が隆盛した。なかでも、多くの人々にとって旅の目的となったのは伊勢参宮であった。19世紀頃には、旅に出る人はますます増加し、新たな旅の目的地も発生するようになった。そのうちのひとつが、讃岐国の金毘羅参詣である。

金毘羅参詣の流行にともない、参詣の経路を示した絵図や、道中の名所を紹介する名所案内記など、さまざまなものが出版された。なかでも、金毘羅参詣の道中の名所を取り上げて図絵を付して紹介したのが、暁鐘成による『金毘羅参詣名所図会』である。

第2章では、本研究に関わる金毘羅信仰や、近世の

旅文化、名所論にかかわる既往研究の整理をおこなう。第3章では、本研究で分析対象とする『金毘羅参詣名所図会』の概要を示したのち、分析の方法について示す。

第4章においては、『金毘羅参詣名所図会』に記載された讃岐国の名所について、地図化をおこなうことで地理的な特徴を明らかにしたのち、名所を属性別に分類・集計して『名所図会』に表象された讃岐国の名所の特徴について指摘した。

最後に、第5章では、旅の目的地である琴平において、暁鐘成が重きを置いて取り上げたと考えられる「象頭山八景」について、八景を描いた図絵とその内容を、既存の八景の様式と比較する形で検討を加えた。

## 2. 既往研究の整理

近世の旅や名所に関する研究は、さまざまな視角からおこなわれてきた。歴史学においては、交通史や宗教史という観点から、近世の旅の特徴やこの時期に旅が隆盛した社会的背景などが明らかとなってきた（新城 1982）。

19世紀に入ってから流行をみせた金毘羅信仰やその旅についても、その信仰の発生過程や信仰対象とされる「コンピラ」について議論がおこなわれており、もともと雨乞いの神であった金毘羅大権現が、インドのワニの神である

「クンピーラ」と結びついたといった説が指摘されている(北川 2018)。

歴史地理学においては、旅人の記した旅の記録から、旅人の通った経路を復原することが試みられてきた。関東地方からの旅日記を分析し、旅の経路を検討した小野寺(1990)は、1700年代にはあまりみられなかった金毘羅参詣が1800年頃に増加へと転じたことを指摘している。さらにその延長として、四国八十八ヶ所巡礼や、安芸の宮島、岩国の錦帯橋まで足を延ばす者が出始めたという。19世紀に入った頃に流行した金毘羅参詣が、旅の経路に変化を生じさせたのである。

当時の旅人は、伊勢や京都といった旅先において名所を見物していた。各地では名所を紹介した名所案内記(案内記)が出版され、それは旅人の見物行動にも影響を及ぼしたものと考えられる。このような案内記のなかでも、名所を俯瞰図で描いた挿絵を豊富に記載した「名所図会」シリーズは、京都を取り上げた秋里籬島の『都名所図会』(1780)を嚆矢として、全国で作成されるようになる。

名所図会の挿絵からは、近世当時の名所の景観復原をおこなうことが可能であり、京都において鴨川の河川景観(小椋 1990)や東山の植生の復原(吉越 1993)といった研究がなされてきた。加えて、名所の表象には作者の名所へのイメージや認識が反映されているという人文主義地理学的な視点から、名所図会を作成した作者の意図や、当時の人々の認識、その社会背景についても論じられている(長谷川 2004, 千葉 2007)。

名所図会の表象にみる名所への作者の認識は、名所図会というメディアを通じて当時の人々に共有されたと考えられる。旅人が記した旅日記には、実際に名所図会を参照して訪れる名所を探したことも書かれており、名所図会は、旅人にたいしてその地域のどういった場所が名所なのかを認識させる役割を果たしていたことがわかる。

金毘羅参詣が流行した19世紀は、全国的に旅文化と出版文化が隆盛していく時期であった。金毘羅参詣の流行が起きたことによって、それに関連する書物や絵図の作成・出版も盛んとなった。

本研究は、そのような社会背景のなかで暁鐘成によって作成された『金毘羅参詣名所図会』を対象として、讃岐国のなかで名所とされていた場所の基本的な概要を把握したうえで、その特徴や作者の意図について若干の考察を加えるものである。

### 3. 分析対象とする資料と研究の方法

#### 3-1. 分析対象とする資料

本研究で分析対象とする金毘羅参詣を題材とした名所図会『金毘羅参詣名所図会』(1847)は、大坂の戯作者である暁鐘成(1793-1860)によって作成され、同じく大坂の画家・浦川公佐が挿絵を描いた。版元は、江戸の書林である須原屋茂兵衛、山城屋佐兵衛、岡田屋嘉七、丁子屋平兵衛、京都の丸屋善兵衛、大坂の塩屋市郎治、堺屋新兵衛、堺屋定七となっている。6巻6冊からなり、名所図会の特徴となる挿絵が豊富である。本研究の分析には、臨川書店発行の『版本地誌大系 19巻金毘羅参詣名所図会』と、早稲田大学所蔵のものをあわせて利用した。

『金毘羅参詣名所図会』は、ほかの名所図会シリーズと同様に、冒頭に序文と凡例が記されたのち、その巻に記載されている名所の目次が「目録」として示される。本文には、まず名所の名前が記されたのち、その名所に関する由緒や説明、伝承といったものが記されている。名所によっては、その景観や名所にまつわる伝承を描いた図絵が挿絵として載せられる場合もある。

『金毘羅参詣名所図会』の出版は弘化4(1847)年であるが、作成にあたり、暁鐘成は刊行の前年に絵師を同行させて現地調査をおこなっている。これについては、『版本地誌大系』の解説に詳しいが(柳瀬 1998)、『金毘羅参詣名所図会』の序文は次のようにある。

今年後の皐月のはじめなりけん、たまもよし狭貫なる象頭山にまうで、みな月の末までかの国わたりにあそび、名くはしき海山けしきあるところどころ、あるは神廟・仏室のたぐひ、あるは宮闕のあと、古戦場など、人のまうでとはんかぎり、玉鉾の道をつくし、夏草のつゆもらさず、その真景を画にうつさせ、かつ古歌・旧記および土人の口碑も正しきは摘みとり、すべてことのさまつばらにかきのせ六巻となし、金毘羅参詣名所図会と号く。(中略)弘化三とせの長月 植松修理権太夫源雅恭朝臣 雅恭しるす(『金毘羅参詣名所図会』:3-7)

ここにあるように、鐘成は弘化3(1846)年の閏5月から6月末までの2ヶ月間、讃岐国を訪れて現地調査をおこなった。序文によれば、鐘成が「名所」として取材したのは、名のある海や山などの景勝地、神社仏閣、宮城跡、古戦場であった。加えて、古歌や古典籍類の記述や、土地の人の話・伝承なども正しいものは記載したと述べている。

#### 3-2. 研究の方法

研究方法は以下のとおりである。まずは、『金毘羅参詣名所図会』に記載された名所の目録を抜き出し、近世の讃岐国において名所とされていた場所を把握した。ただし、『金毘羅参詣名所図会』の場合、目録に記載があるものの本文に項目がなかったり、反対に目録にないものが本文に項目として表れたりする場合があったため、その際は適宜追加・削除をおこなっている。

次に、名所として項目がつくられていた場所を地図に落とし、名所の分布図を作成した。これによって、『金毘羅参詣名所図会』で名所として取り上げられた場所の地理的な特徴を把握した。

また、それらの名所の属性について、鐘成自身が序文に名所として調査をする対象としたものを参考に分類した。ただし、ほかの名所図会シリーズでもみられるように、『金毘羅参詣名所図会』でも、神社仏閣の構成物といえる堂塔伽藍などの建造物について一項目として紹介されている場合が多い。そこで、こういった場合にかんしては、神社仏閣とは別に「堂塔伽藍」として分類することとした。その結果、属性としては、①景勝地、②神社仏閣、③堂塔伽藍、④旧跡（宮城跡、古戦場など）、⑤古歌をはじめとした和歌関連、⑥伝承、となった。④旧跡について記した項目のなかで、その場所に関連する過去の情景を表象しているものについては、⑥伝承、としている。

さらに、記載された名所と本文の記述を検討したうえで、⑦現在名所、⑧名産、⑨風俗、⑩その他、の項目を追加した。

⑦現在名所は、当時の賑わいについての記載がみられるもの、⑧名産は、その土地の名産品についての記載、⑨風俗は、その土地の生活の様子などが記されているもの、上記のいずれにも含まれないものを⑩その他、としている。以上の計10項目の分類から、近世の讃岐国における名所の特徴について検討した。

次に、描かれた名所の景観について、図絵の構図について分類した。『都名所図会』の凡例には、図絵に描かれる名所空間についての指標が示されているが（長谷川2010）、『金毘羅参詣名所図会』にはそのような凡例がないため、千葉（2007）による『江戸名所図会』の図絵分析を参考にしたうえで次の4段階に分類した。（1）近景：視点から10mほど。人物の属性、服装の特徴、個人の要望などを明確に判別することができる。（2）中景：視点から数10mまでのもの。目・鼻・口など風貌の造作がやや略されるが、服装・髪型などは判別することができる。（3）遠景：対象から100m以上。顔は白抜きか黒で塗りつぶされるが、服装や髪型を読みとることはできる。（4）超遠景：対象から数100m。人物は棒のような形で表される。以上のような図絵の構図の分類と、先述の名所の属性分類をあわせて、両者の関係について検討した。

最後に、『金毘羅参詣名所図会』のなかで特徴的といえる記載情報から、現地調査をおこなった鐘成が実際にみた、もしくは鐘成が『名所図会』を通して表象したいと考えた讃岐国の名所について検討した。

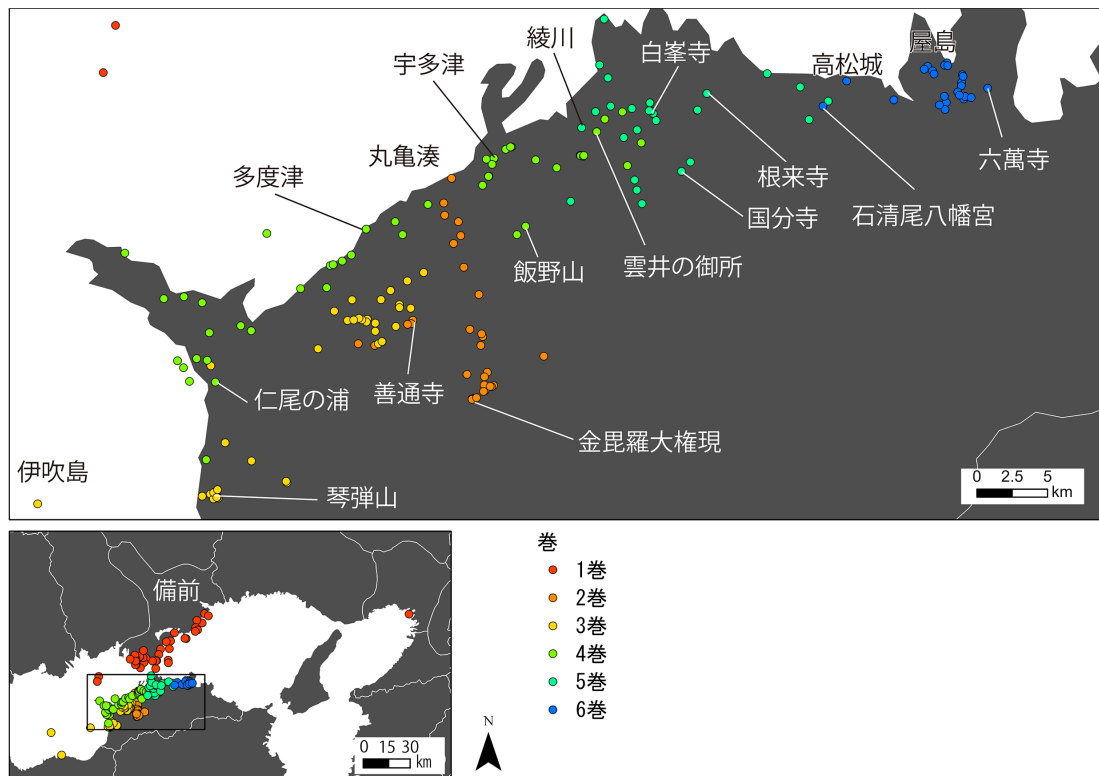


図1 『金毘羅参詣名所図会』に記載された名所の分布

#### 4. 『金毘羅参詣名所図会』にみる讃岐国の名所とその特徴

図1は、『金毘羅参詣名所図会』に記載された名所を地図化したものである。暁鐘成は、凡例に「円亀の津に渡るハ多くハ詣人浪華より船にて下向なすにより先船中より眺望の名所を粗出せり」(『金毘羅参詣名所図会』:10)と記しており、丸亀港に行く者は、大坂から船に乗ることが多いため、まずは船中からの眺望の名所を取り上げることが説明されている。

また、「摂播の海辺ハ先板に詳なれば、是を省き備前の海浜より著すなり」(『金毘羅参詣名所図会』:10)ともあり、先に出版された案内記類に取り上げられている摂津・播磨国の名所は省き、備前国からを取り上げることが記されている。ここで鐘成が述べているとおり、1巻の冒頭には「浪華川口出帆之図」、つまり大坂の河口を発した船の図が記載されており、その次の項目は備前国の歌枕である「虫明の迫門」となっている。

1巻に記載された名所の多くは、備前国の沿岸部、もしくは海中の島々である。図絵にも、船からみた湊や島の様子が描かれており、鐘成の丸亀への旅を追体験できるような構成である。

2巻の冒頭は、丸亀港への着船であり、船からみた丸亀港やその奥にある町と城の様子が描かれる。そのあとは、丸亀から陸路で金毘羅参詣をおこなう人々の行程が意識されるような形で、目的地となる金毘羅大権現と道中の名所が取り上げられる。2巻には、丸亀から金毘羅大権現を経て善通寺までの名所が記載されている。

3巻は、善通寺近くの西行庵から始まっている。それから、金毘羅大権現より西にある弥谷寺、現在の観音寺市にあ

る琴弾八幡宮や観音寺のほか、伊吹島、大島といった讃岐国西部の島々が取り上げられている。

4巻も、同じく讃岐国西部が対象となっており、冒頭は仁尾の浦(三豊市)である。ここでは、島々のほかに海中にみえる特徴的な岩や石なども取り上げられている。それから東へ向かうような形で、四国巡礼の札所である海岸寺、多度津、宇多津などが順に紹介される。さらに、飯野山を経て、崇徳天皇の過ごした雲井御所の旧跡(坂出市)までが記載されている。

5巻の冒頭は、綾川である。白峯寺や、そこにある崇徳天皇陵の記載がみられる。さらに東へ向かい、札所である国分寺・根来寺などを経て、鷲田の古城(高松市東ハゼ町)までが取り上げられている。

最終巻となる6巻は、石清尾八幡宮から始まる。それから高松城、屋島が取り上げられる。屋島では、源平合戦にまつわる旧跡が紙面の多くを占めている。この巻は、平家一門が逗留したとされる六萬寺(高松市牟礼町)で終わっている。

『金毘羅参詣名所図会』に取り上げられた名所の地理的な範囲は図1に示したとおりであり、讃岐国の北側にある名所を中心に記載していることがわかる。屋島より東側や、讃岐国の南部にあたる名所については触れられていない。この『名所図会』は、金毘羅参詣をテーマにしているため、記載範囲が限定されたことは想像に難くない。ただ、鐘成はこの『名所図会』を作成している段階では、『拾遺』として続編を作るつもりであったようで、凡例には「其境地を妄失して臆気なるハ、図を出さず。且炎暑の苦熱に勞れて碑文など写し得ざるあり。則ち雲井の御所の碑、太夫黒の碑、花立碑、宝蔵一覽の記、靈験石の類ひなり。是等ハ再回彼土に渡海し、委く写して拾遺の編に詳かにすべし」(『金毘羅参詣名所図会』:10)とある。現地調査の際に訪

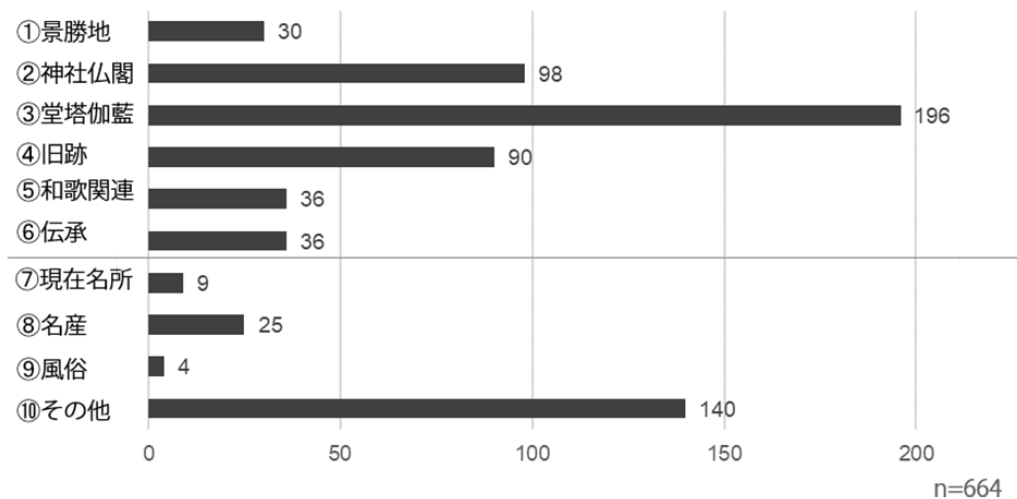


図2 『金毘羅参詣名所図会』に記載された名所の属性別分類



表1 『金毘羅参詣名所図会』に記載された図絵の構図とその属性

	伝承	寺社	和歌関係	旧跡	景勝地	堂塔塔頭	現在名所	風俗	名産	その他	総計
近景	18	0	1	2	0	0	0	2	2	1	26
中景	12	0	3	7	4	1	1	1	1	1	31
遠景	0	28	6	5	4	5	2	1	0	8	59
超遠景	0	0	7	0	2	1	3	0	0	3	16
その他	0	0	0	2	0	0	0	0	1	2	5
総計	30	28	17	16	10	7	6	4	4	4	137

れたが記憶が定かでない場所、またあまりの暑さで疲れてしまい碑文を写すことができなかった場所については、再びその地を訪ねて拾遺の編にまとめる予定であったようだ。

結果として、この『名所図会』の続編が出版されることはなかった。このうち、鐘成は『西国三十三所名所図会』（1853）や『摂津名所図会大成』（安政年間/1855-1860）といった案内記を相次いで出版しているため、讃岐国を再訪する余裕がなかったのかもしれない。続編は、今回の『名所図会』で取り上げた名所をさらに詳細に取り上げるつもりであったのか、記載範囲を広げるつもりであったのかはわからない。

次に、『名所図会』に記載された名所について、属性別に分類をおこなった。図2は、『金毘羅参詣名所図会』に記載された名所を属性ごとに分類したものである。最も多いのは、寺社の構成物である「堂塔伽藍」、その次が「神社仏閣」であり、寺社関係の属性をもつ名所が多いことがわかる。その次に多い「旧跡」には、源平合戦の古戦場などが含まれる。

『金毘羅参詣名所図会』に記載された名所では、この上位3分類が数としては圧倒的に多く、「和歌関係」以下の名所は少ないことがわかる。寺社に関連している堂塔伽藍を除けば、『名所図会』に取り上げられた名所は寺社と旧跡が中心だといえる。

また、「その他」に分類された名所は140ヶ所あるが、このうち128ヶ所は位置情報以外にはとくに記述のない地名である。これは、『金毘羅参詣名所図会』の目録および本文の項目に取り上げられているものの、名所とは言い難い場所である。このような地名が名所と同じように項目立てて記載されているのは、『金毘羅参詣名所図会』が鐘成自身の讃岐国への旅をもとに、金毘羅参詣の経路を念頭に置いて作成されたからだと考えられる。

最後に、図絵の構図を視点別に分類し、その特徴について検討をおこなった。表1は、図絵の構図を近景から超遠景の4つに分類したうえで、名所の属性別に集計をしたものである。これをみると、図絵に描かれる対象としては、伝承と寺社がやや突出して多いことがわかる。

3番目に多いのが和歌関係、4番目が僅差で旧跡となった。

それぞれの構図をみてみると、最も図絵の多い伝承は近景・中景の構図で描かれ、寺社は遠景で描かれている。寺社を遠景で描くというのは、『都名所図会』で秋里籬島が最初に用いた、名所を鳥瞰図のように俯瞰的な視点で描く構図である。こうすることで、堂塔塔頭を含む寺社を構成する要素を1枚の絵におさめることができる（長谷川2010）。

伝承は、旧跡にまつわる過去の様子を想像で描いたものであり、丸亀の光明庵で法然が井戸を掘ったという伝承を描いたものや、屋島合戦で那須与一が扇を射る様子が描いたものがある。鐘成自身が取材に訪れて目にした名所の様子ではなく、名所（旧跡）にまつわる伝承上の場面を近い視点から描いている。

一方で、旧跡の図絵では、その名所を訪れた鐘成が実際にみた景色、もしくはそれに脚色をほどこした可能性のあるものが描かれている。例えば、日證上人の墓では、旅人たちが巨岩を重ねた上に立てられた卒塔婆と背比べをしている様子が描かれている。実際に鐘成がこのような光景をみたのかはわからないが、土地の人から話を聞いた可能性もあり、取材の成果が最も表れている構図ともいえる。

遠景よりさらに遠い視点である超遠景で描かれた名所のなかには、「和歌関係」、「地名」、「景勝地」、「現在名所」などが含まれる。これらには、海上から湊を臨んだ風景や、反対に陸地から海を臨んだ風景が該当する。その場所が歌枕であった場合は「和歌関係」（7件）、当時の賑わいが記されていれば「現在名所」（3件）、眺望に関する記述があれば「景勝地」（2件）と分類した。

『金毘羅参詣名所図会』には、このような海辺に関する風景の図絵が多く記載されている。海上からの風景は1巻、陸上からの風景は3・4巻に多く、これは鐘成の取材時の行動や視点が反映されたものと考えられる。つまり、大坂から丸亀へ向かう1巻では、実際に鐘成が船上からみた風景が描かれ、讃岐国西部（現在の観音寺市・三豊市）の名所を取り上げた3・4巻では、鐘成が海岸からみた風景が描かれているのである。

とくに海上からの風景には、海や山といった自然景のほか、湊の様子、家々が建ち並ぶさま、停泊・航行している船、塩浜で塩をつくっている人々の生活といった人文景・生活景が描かれている。このような図絵の上部には和歌が付されており、名所として描かれた風景に和歌を付すというのは、歌枕的な風景を想起させる。しかし、図絵に和歌を付すのは『都名所図会』からの伝統であり、ここに表象されているのは歌枕としての風景ではなく、自然景と人文景・生活景が入り混じった風景だといえる。

## 5.『金毘羅参詣名所図会』と象頭山八景

『金毘羅参詣名所図会』のなかで目的地である金毘羅大権現のある琴平が取り上げられた箇所をみると、「象頭山八景」、「象頭山十二景」と付された項目がある。このような八景や十二景は、近世に流行した定数名所であり、著名なものでは近江八景、金沢八景などがあげられる。もともとは、中世の和歌による名所百景の選定や、絵画・漢詩などによる中国の瀟湘八景、西湖十景が日本でも受容され、近世になって旅の隆盛とともに普及したものと推定されている(西田 1999)。

「象頭山十二景」は、幕府の奥絵師であった狩野安信

(1613-85)、時信(1642-78)父子が、景勝を六景ずつ描いた十二景からなる(松岡 2004)。享保3(1718)年の記録によれば、延宝年間(1673-80)に金光院別当・宥榮が象頭山の「十二勝区」を選んで林学士父子に詩作を依頼し、狩野父子に図を描かせ、書で知られた上左兵衛に林氏の詩を写させた。

具体的には、「左右桜陣」、「後前竹圍」、「前池踊魚」、「裏谷遊鹿」、「群嶺松雪」、「幽軒梅月」、「雲林洪鐘」、「石淵新浴」、「箸洗清漣」、「橋廊複道」、「五百長市」、「万農曲流」の十二景を指す。この十二景は、時代が下っても受け継がれていくが、この構成は常に一定ではない。例えば、「石淵新浴」が紅葉を配する「楓時秋萩」となったり、愛宕山の夕陽を指す「宕嶺夕陽」、時太鼓を打つ鼓楼「鼓楼松翠」、高灯籠のあたりに鳴くほととぎす「灯閣鶉声」、象頭山の新月「象山新月」などが十二景に含まれたりすることもある(琴陵 1970:117-119)。

ただし、『金毘羅参詣名所図会』をみると、この「十二景」よりも「八景」に重点が置かれていることがうかがえる。「十二景」については図絵が存在しないものの、「八景」については「興泉寺鳴鐘」を除く七景を描いた図絵が記載されているのである(図3)。

表2は、「象頭山八景」を『名所図会』への記載順に示



図3 『金毘羅参詣名所図会』に記載された象頭山八景の図絵

『版本地誌大系 19 金毘羅参詣名所図会』臨川書店(1998)より転載。

① pp.104-105, ② pp.121, ③ pp.123, ④ pp.124, ⑤ pp.129, ⑥ pp.137, ⑧ pp.326-327. ただし、図絵のない⑦「興正寺鳴鐘」を除く。



表2 象頭山八景とそれに関する記述

番号	象頭山八景	『金毘羅参詣名所図会』の記述	八景の対応
①	(讃州円亀鎮城川口船場)	(略)湊口に八縦横に石の波戸ありて紫銅の大燈籠夜陰を照し、監船所の嚴重濱々の石燈籠魚市の群集、御城ハ正面の山岳に魏々として驚悟しく、内町にハ市店軒をならべ、交易にいとまなく、就中籠の細工物洪団、円座など名物也とて鬻家多く、旅客かならず需めて家土産とするなど、街の繁栄実に当国第一の湊と言ふべし	帰帆
②	二本樹春風	鳥居の内左右にあり。象頭山八景の内にして二本樹の春風など号せり。此所に行程五十丁の標石あり	晴嵐
③	満濃池遊鶴	石淵の川上にあり。弘仁帝御宇築く所なりとぞ。則下流八十二景の内に加ふ。金毘羅の町より一里ばかり巽にあたれり	落雁
④	打越坂夕陽	金毘羅より凡一里。許寅の方にあり	夕照
⑤	清氏塚秋雨	一の坂の上鼓樓の傍にあり。近年墳の辺に碑を建り	夜雨
⑥	愛宕峰朧月	道の左にあり。向ふに見へたる愛宕権現の拝所なり	秋月
⑦	興泉寺鳴鐘	往還より遙か東に見ゆる。近世八景の内に加ふ	晩鐘
⑧	飯野山積雪	川津村の山分なり。当国第一の名山にして、いわゆる讃岐の富士とも称す。又カ山とも号す。讃岐にハこれをや富士といふの山朝けの煙 たらぬ日もなし 西行	暮雪

したものと、各項目についての『名所図会』の記述である。

①は、北から丸亀港をみた様子であり、手前が海、そして湊、一番奥に雲で区切られて丸亀城が描かれている。②は、金毘羅大権現の紫銅の鳥居を東からみた構図であり、鳥居を眺める人、くぐる人、傍らの石碑を眺める人などがみえる。画面奥に桜、手前にはみ出すように松が描かれている。道の周辺は田畑となっている。③については、満濃池の手前に鳥居と御堂(神野神社か)がみえ、池の畔と空には鶴が描かれている。本文中に、下流は十二景のひとつであることが記されており、これは「満濃曲流」を指すと考えられる。④には、街道と、そこを歩く旅人、街道脇の松と、田が描かれている。⑤では、金毘羅大権現の参道が描かれており、参道の建物や参詣者、「告ノ茶屋」の女と参詣者が話している様子がみえる。画面左上に鼓樓と、近年建てられたという石碑と、清少納言の墓が描かれる。この清少納言に関する旧跡については、次項に図絵付きで紹介されている。

⑥では、愛宕山自体の記述はみられないが、愛宕山と空に浮かぶ三日月が描かれている。⑦は、八景のなかで唯一図絵がない。「近世八景の内に加ふ」とあることから、新しく八景に加えられたものかと推測されるが、詳細については不明である。最後の⑧では、山頂に雪の積もった飯野山が描かれている。手前には船の帆、山の左側に川津村が描かれているため、北から南を望んだ図だとわかる。

「十二景」については、関連する名所の本文中に説明が付されているのみであることが多い反面、「八景」は図絵付きで紹介していることから、鐘成は十二景よりも八景を重視した構成を考えていたのだろうと推察される。ただし、この八景は、鐘成が実際にみた風景を描いているわけではない。

例えば、②「二本樹春風」を付した鳥居の図絵では、桜が咲いていることから春の風景が描かれていることがわかる。また、③「満濃池遊鶴」の満濃池では鶴が飛来しており、⑧「飯野山積雪」の飯野山では山頂の積雪が描かれていることから冬の風景が描かれている。繰り返しとなるが、鐘成が讃岐国を訪れたのは夏である。そのため、鐘成が春や冬の風景を実際に目にしたわけではない。

八景は、「晴嵐、夕照、晩鐘、夜雨、帰帆、秋月、落雁、暮雪」が必ず一組となっている(石田尾 2006)。さまざまな地域が八景の対象となっているものの、風景のモチーフがさきに決められており、象頭山八景にもこの様式が当てはめられている。

表2には、この様式を象頭山八景に対応させたものを併せて示した。雁が鶴であったり、夜雨が秋雨であったり、多少の差異はみられるものの、象頭山八景にも八景の様式が当てはめられていることがわかる。さきに八景の様式の風景があったことで、鐘成は実際に自分がみた夏の風景ではなく、それぞれの様式に対応したイメージの風景を表象したのだと考えられる。

名所を描いた図絵を観察すると、象頭山八景のほかにも夏以外の風景の描写が多くみられる。とくに、寺社の境内には桜が描かれていることが多い。「象頭山御本社」(金毘羅大権現)の境内を描いた図絵をみても、松、杉、竹に混じって桜が描かれている。ただし、瑜伽山蓮台寺のように桜と紅葉が両方とも描かれているようなものもあり、『金毘羅参詣名所図会』の図絵から描かれた季節と名所のイメージを読みとることができるかどうかは、今後慎重に検討する必要がある。

## 6. おわりに

本稿では、『金毘羅参詣名所図会』を対象として、当時の讃岐国の名所について基本的な分析をおこなった。讃岐国の名所は、寺社と旧跡が中心であり、上杉(2004)の指摘する名所観の観点からみると、「過去名所」の「俗名所」から構成されているといえよう。これは、「過去名所」から「現在名所」へ名所観の変化した大坂、「歌名所」を中心とした「過去名所」が中心である京都、「現在名所」が中心である江戸のいずれとも異なる名所観である。

図絵に描かれる対象は、伝承と寺社が多く、想像上の過去への意識と信仰的な要素が強く表れているといえる。その一方で、数値としては目立たないものの、西田(2007)が指摘するような新しい風景の見方の萌芽もみられる。歌枕と旧跡をもとめて旅をしていた旅人たちは、時代がくだるにつれて伝統的な風景観から脱却し、歌枕や旧跡とは異なる自然の景観を美しい風景としてもとめるようになった(西田1999)。「下津井ノ浦ノ後山扇峠より南海眺望之図」と題された塩飽諸島の展望図は、のちの瀬戸内海国立公園の核心部となる鷺羽山の扇の峠からみた図であり、近代的な風景観の萌芽が指摘されている(西田2007)。ほかにも、海上から湊を望む図絵には、停泊する船や建ち並ぶ家々といった人文景と、塩浜の製塩業や漁業の様子といった生活景が描かれており、ここでも和歌に表象された風景ではなく、実際の風景が名所として描かれていた。

一方で、象頭山八景にみられるような名所の定数化は、和歌による名所百景の選定や、中国の瀟湘八景、西湖十景の受容を経て、近世の旅の隆盛とともに普及した(西田1999)。これは、漢文学のまなざしによる新たな風景の見方であり、『金毘羅参詣名所図会』には、伝統的ともいえる「過去名所」のほかに、近代的な風景観ともいえる海上・沿岸部の風景と、漢文学的な風景が名所として表象されていることがわかる。

近世後期、金毘羅参詣の流行にともない、案内記だけではなく地図類の出版も盛んになされた。こういった地図には、「象頭山十二景」の記載はみられるものの、「八景」については管見の限り確認できない。また、「象頭山八景」が誰によって創られたのか、なぜ鐘成は「十二景」よりも「八景」を大きく取り上げたのか、「八景」がこののちどのように継承されていったのかは、現在のところ不明である。

「象頭山八景」については、松田緑山による銅版画「象頭山金比羅八景」がカリフォルニア大学バークレー校の東アジア図書館に所蔵されている。八景の内訳は、『金毘羅参詣名所図会』で晁鐘成が取り上げたものと同じである。このうち、「打越坂夕陽」、「愛宕山朧月」、「満濃池遊鶴」、「清

氏秋雨」は、『金毘羅参詣名所図会』の構図と酷似しており、両者に影響関係があることは間違いないといえよう。今後は、こういった絵画資料の来歴とあわせて、鐘成の表象した「象頭山八景」について検討を加える余地があるものと考えられる。

また、讃岐国の名所を考えるうえでは、もう1点の名所図会である『讃岐国名勝図会』(1854)も重要である。金毘羅参詣に関連した絵図のなかで現存しているものも多いため、こういった資料をあわせて検討することで、讃岐国における名所の特徴や、その変遷について、より明確にしていくことができるため、今後の課題としたい。

## 文献

- 晁鐘成, 1847, 『金毘羅参詣名所図会』(晁鐘成, 1998, 『版本地誌大系 19 金毘羅参詣名所図会』臨川書店.)
- 上杉和央, 2004, 「17世紀の名所案内記にみえる大坂の名所観」『地理学評論』日本地理学会, 77(9): 589-608.
- 小椋純一, 1990, 「京都近郊山地の植生史—絵図による近世の植生復元を中心にして」『植生史研究』日本植生史学会, 5: 39-47.
- 小野寺淳, 1990, 「道中日記にみる伊勢参宮ルートの変遷—関東地方からの場合—」『人文地理学研究』筑波大学地球科学系, 14: 231-255.
- 北川央, 2018, 『近世金毘羅信仰の展開』岩田書院.
- 新城常三, 1982, 『新稿社寺参詣の社会経済史的研究』塙書房.
- 千葉正樹, 2007, 『江戸城が消えていく—『江戸名所図会』の到達点』吉川弘文館.
- 西田正憲, 1999, 『瀬戸内海の発見—意味の風景から視覚の風景へ』中央公論新社.
- , 2007, 「描かれた瀬戸内海(8)『金毘羅参詣名所図会』と『讃岐国名勝図会』」『瀬戸内海』, 公益社団法人瀬戸内海環境保全協会, 49: 29-34.
- 長谷川奨悟, 2010, 「『都名所図会』にみる18世紀京都の名所空間とその表象」『人文地理』人文地理学会, 62(4), 60-77.
- 松岡明子, 2004, 「素晴らしき詩画に示す, 金刀比羅宮美の世界」(2021.10.6, <https://www.shikoku-np.co.jp/feature/kotohira/story/51.html>).
- 柳瀬万里, 1998, 「解説」晁鐘成『版本地誌大系 19 金毘羅参詣名所図会』臨川書店: 514-525.
- 吉越昭久, 1993, 「名所図会類にみる河川景観—近世の京都、鴨川を中心に—」『奈良大学紀要』奈良大学, 21: 145-156.

(受理日: 2021年10月10日)

(せとうち観光専門職短期大学・助教)

E-mail: yuki-tanizaki@g.seto.ac.jp